

主の建てる家

ピーター

この度、芦屋に日本で初めての子羊の群れ教会堂ができました。教会とは、「神に呼ばれた者たち」という意味で、建物とか組織のことではありません。主を賛美する民が集められたところが教会です。建物はその民が礼拝するための場であり、こんなすばらしい礼拝の場が与えられたということに、私は深く感動しています。

「子羊の群れ」のビジョンが与えられた時から、近い将来日本にも「子羊の群れ」の母教会が作られるという予感がありました。そのためにも神の民が毎週集められる場が要るので祈っていましたが、こんなにも早く礼拝の場が与えられるとは思っていませんでした。私の予想をはるかに超えて働かれる主のみわざを見て驚嘆しています。

私はフィラデルフィアの教会の時代、会堂購入で長い間祈り又苦勞して来たので、もう人間の努力の結晶みたいな会堂建設だったら要らないと思っていました。他の教会でも会堂建設に関しては靈的に少しも良いことを聞かない。会堂が信仰の目標になったりするから、やがてそれが分裂の原因になったり、教会員や牧師のプライドになり、偶像礼拝に陥るのです。

でも芦屋の会堂のいきさつを眺めていると——私など少しもしていないから眺めているという表現がびったりなのですが——主が家を建てておられるナ、これはスゴイと思うのです。

主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤勞はむなし。

主が町を守られるのでなければ、守る者のさめているのはむなし。

あなたがたが早く起き、おそく休み、辛苦のかたを食ふことは、むなしなことである。

主はその愛する者に、眠っている時にも、なくてならぬものを与えられるからである。（詩篇 127:1-2）

「子羊の群れ」が存在する理由は、人間の努力の信仰ではなく、主を賛美する民の集いだからです。聖なるお方は、私たちの賛美のただ中でその姿を現される神（詩篇 22:3）。主イエス・キリストさまだけを賛美しておけばよい。聖靈の導くままに、ある人は教えをなし、ある人は奉仕をし、ある人は啓示を告げ、ある人はいやしをなし、ある人は異言を語る。そして皆、主を賛美する。こうしてキリストのからだなる教会ができて行くのです。神の教会は、牧師の指導力や力あるメンバーの滅私奉公、又ミッション活動や早天祈祷会のなせるわざによるものではありません。肉の力によるものではありません。そして、肉に始まるものはいくら磨いても肉の悪臭を放つようになる。しかし、靈に始まるものは御靈が導く。

主は靈。主の靈のあるところ自由があり、光があり、よろこびがある。

私たちは主だけを賛美し、主だけを見て行きましょね。私たちはもっともらしい規律や肉の思いやりのベールを脱ぎ捨て、主の栄光を鏡に映すように見て行こうではありませんか。見る者はその対象に似せられて行く。これは靈なる主の働きです。

1993年11月14日

（「白いハト4」より）